

国際交流・海外調査報告

韓国建設技術研究院 25 周年記念 国際シンポジウム 「土木・建設エンジニアリングの未来」 に参加して



美濃部雄人

調査第三部
部長

1. はじめに

2008 年 6 月 17 日（火）韓国ソウル市で、標記シンポジウムが開催された。

韓国建設技術研究院は、日本の国土技術政策総合研究所と同様、専ら建設技術の開発に携わる公的な研究機関である。

今回のシンポジウムのテーマ設定に当っては設立 25 周年にふさわしく、人類が直面する長期的な取り組みを要する課題について、土木・建設技術者がどのように立ち向かうべきかを考えるテーマが設定された。

当日の演題は以下のとおりである。

Evolution of Science and Technology in Korea CHOI Youngrak Former Chairman, Korea Research Council of Public Science & Technology
The Role of the 21 Century Engineer in the Midst of Global Engineering Crises Patricia D. Galloway Chief Executive Officer, Pegasus Global Holdings, Inc. Former President, American Society of Civil Engineers
Climate Variability and Change: Analyses and Strategies for Adaptation Upmanu Lall Professor, Columbia University
Sustainable Development and Utilization of Water Resources in China Yicheng WANG Director of Remote Sensing Center, China Institute of Water Resources and Hydropower Research
Lessons Learnt from Recent Earthquakes and Technical Issues on Earthquake Engineering MATSUO Osamu Research Coordinator for Earthquake Engineering, Public Works Research Institute
Infrastructure Construction in the Aging Society MINOBE Yūjin Director of City Planning Division, Japan Institute of Construction Engineering
Rivers and Human Activities WOO Hyoseop Acting President, Korea Institute of Construction Technology

2. 講演内容について

まず、CHOI 氏は、韓国の経済発展の各段階における科学技術の果たしてきた役割について概観した後、先進国に追いついた韓国の科学技術は、パラダイムを創造しリスクを取っていく力を確保しなければならないと締めくくった。

続いて、Galloway 女史の講演は、今後の土木技術者の役割をテーマに行われた。

建設工事がグローバル化し、建設工事の影響が国際化している中で、エンジニアは英語を話し、国際的な環境、経済に理解を深めなければならないことが強調された。

次の Lall 教授の講演は、地球温暖化に伴う気候変動と、それへの適応策に関するものであった。

WANG 氏は、中国の持続的な水資源の利用について講演した。中国は、南北の水資源の不均衡、非効率な水利用、汚染等の問題をかかえており、水利用行政の改善、水を大切に社会、水利用への課金などソフト施策とハード施策双方からの展望が示された。

松尾氏は、中越地震など、最近の地震から得られた構造物設計への教訓について報告した。折りしも、四川大地震、岩手・宮城内陸地震直後であったため、聴衆の関心も高かった。

続いて、筆者が日本の高齢化社会における社会資本整備について講演した。



図-1 講演する筆者

講演では、差別への反対運動としてバリアフリーが進んだアメリカ、高齢化の進む中でのニーズへの対応としてバリアフリーが進んだ日本の考え方に違いを紹介し、日本より20年遅れ、日本以上に急速に高齢化が進む韓国では参考になるよう、バリアフリー法制の流れ、高齢者用住宅や自律移動支援システムなど新しい技術を活用した取り組みについて紹介した。

最後はWOO 院長による「人間活動と川」と題した講演であった。文明の発祥から現代に至人と川の関係性を概観した後、21世紀の自然回復を図る河川工事等について紹介をした。

特にパネルディスカッションなどは設定されておらず、個々の講演の羅列ではあったが、経済指標の上では先進国の仲間入りをした韓国が、技術のパラダイムづくりにおいても世界をリードする役割を果たしたいという意欲が十分聴衆に伝わる構成となっていた。

なお、講演会は韓、英の2カ国語で資料作成、同時通訳が行われたため、本文中の日本語訳、講演概要に関する日本文の文責はすべて筆者にある。

3. 韓国建設技術院とのディスカッション

翌日、私は韓国建設技術研究院を訪れ、建築・都市研究室のメンバーとディスカッションを行った。まず先方から、韓国の集合住宅の歴史について説明を受け、午後には大宇建設のマンション展示場（特に未来志向の住宅設備を提案する展示を行っている）を見学した。

当方からは、日本の高齢者住宅、療養病床、介護保険などを含めた高齢者の住環境を確保する方策を、社会福祉士である妻から聞いている話を含めて話題提供した。

院のメンバーは、建築技術者でありながら日本の高齢者福祉制度をよく勉強しており、日本の失敗を踏まえた介護、住宅政策のポリシーミックス実現を志向している様子が伺えた。また、マスコミの影響で、韓国人は高齢者を大切にするという印象を訪問前は持っていたが、産業構造と住宅事情の変化により、日本同様にそうした美風は急速に衰えているとのことであった。

4. 韓国のバリアフリー

今回の出張では、講演に先立ち、釜山とソウルの地下鉄を利用し、まちなかを歩いて現況を視察した。まず釜山においては、地下鉄の階段では車椅子リフトが付加してある程度の駅が多く、健常者を含めたユニバーサルデザインはまだまだという状況であった。

また、ソウルの地下鉄もエレベーター等の設置が釜山よりは進んでいるが、上下動はあくまで階段が主といった印象であった。しかし、車で市内を回っていると、至る所で歩道の段差解消工事が行われており、これからの高齢化社会に向けたインフラ整備への意欲が感じられた。

逆に、バス、地下鉄も含めた統一の運賃体系や充実したバス専用レーン（名古屋の基幹バスに近い）など、先進的な取り組みも行われており、（ソウル特別市の潤沢な独自財源とシンクタンクの存在がそれを可能にしたらしい）日韓ともに成功事例を学び合うことが大切であると感じた。



図-2 釜山の地下鉄駅の車椅子リフト